

## 新シリーズ「ヨハネの福音書」 1

## ヨハネ 1 : 1-18

1:1 初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。 1:2 この方は、初めに神とともにおられた。 1:3 すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。 1:4 この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。 1:5 光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。 1:6 神から遣わされたヨハネという人が現れた。 1:7 この人はあかしのために来た。光についてあかしするためであり、すべての人が彼によって信じるためである。 1:8 彼は光ではなかった。ただ光についてあかしするために来たのである。 1:9 すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた。 1:10 この方はもともと世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。 1:11 この方はご自分のくにに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。 1:12 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。 1:13 この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。 1:14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもともとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。 1:15 ヨハネはこの方について証言し、叫んで言った。「『私のあとから来る方は、私にまさる方である。私より先におられたからである』と私が言ったのは、この方のことです。」 1:16 私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けたのである。 1:17 というのは、律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。 1:18 いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。

## 導入

この福音書の主題は、ヨハネ 20 : 30-31 に見られます。

20:30 この書には書かれていないが、まだほかの多くのしるしをも、イエスは弟子たちの前で行われた。 20:31 しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。

ヨハネの福音書は、イエス・キリストが公生涯を送られた期間に、ご自身の神性、つまり、人間の姿をとって地上に来られた神であることを示すしるしについて語ります。これらのしるしは、弟子たちをはじめとする多くの人々によって目撃されており、信じるに値します。ヨハネは、自身の記す福音書を見聞きする人たちが、イエス・キリストを救い主であり主として信じ、御名にある新しいいのちを得ることを望んでいます。

イエスは、主であり救い主として私たちがイエスを受け入れることを望んでおられます。私たちがこれを理解するのが大切です。クリスチャンになった人は、好き勝手に生きることはできません。イエスと神のみことばである聖書に従う必要があります。イエスは、イエスへの信仰や救いについて多くの人が誤解すると、マタイ 7 : 21-23 でおっしゃいます。

## マタイ 7 : 21-23

7:21 わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみところを行く者が入るのです。 7:22 その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなた

の名によって奇蹟をたくさん行ったではありませんか。』 7:23 しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』

イエスが私たちの人生の主であるかどうかは、イエスと一対一のつながりを持ち、主のみこころをなすことによって示すことができます。イエスとつながることなく、イエスの教えや聖書のみことばに従おうとするなら、それは律法を守っているだけであり、新たな宗教を生みだしているに過ぎません。日本にはあらゆる宗教があふれています。律法主義のクリスチャンになって、宗教をこれ以上増やすようなことはしないでおきましょう。

これからヨハネの福音書を皆さんと学んでいきます。この学びをとおして、私たちがイエスをもっとトータルに信頼し、イエスにある新しいいのちを神の愛にあふれて元気いっぱい生きられるよう願います。

クリスチャンでない人にも、ヨハネの福音書はとても大切な書です。聖書全体の中で知るべきことが記されていますし、イエスについていくとはどういうことかも知ることができます。この福音書には、旧約聖書の教えも登場します。それらの教えは、救い主であり主として私たちがイエスを必要としていることを示してくれます。

ルカの福音書 24:7 で、イエスはよみがえり、エマオの途上でふたりの人に語られます。その内容は、旧約聖書全体からご自身についての教えでした。福音書やイエスの教えを理解するには、旧約聖書の理解も必要です。

マタイ、マルコ、ルカの3つの福音書は、イエス・キリストのこの世の人生における出来事がおもな内容です。ヨハネは、これらの出来事における霊的な意味が主題です。出来事をさらに掘り下げ、他の福音書では特筆されていない真理を提示します。

ヨハネは、聖書学者や説教者に親切と言えるでしょう。最初の18節にヨハネの福音書の序論があります。この箇所は、ヨハネの福音書の主なテーマについての目次部分と言えます。

この18節の中にある序論の箇所に対応する箇所が、残りの福音書に登場します。ヨハネは、この序論部分で使った単語を、残りの福音書で後から解き明かします。その単語とは、光、いのち、証言、まこと、世、栄光などです。

序論に続く部分は、序論を展開した内容です。

例えるなら、この世で一番美しい建物の入口にいるツアーガイドのようなものです。私たちは、このツアーガイドといっしょに入口に立ちます。すると、その建物の見どころをツアーガイドが説明します。このように前もって説明を受けることで、建物の中にあるものの価値を十分に味わうことができます。

私たちは、できるだけ完全なイエス・キリストのイメージをヨハネの福音書から得なければなりません。そのためには、福音書に登場する旧約聖書の箇所もしっかり検証する必要があります。

1章1-18節で、ヨハネはたくさんの主題を提示します。これらのテーマは後に登場する箇所につながっており、この箇所がヨハネの福音書の序論を構成します。

今日これらのテーマをしっかり取り上げる時間はありませんが、ツアーガイドが美しい建物の入口でするように、ポイントのみかいつまんでお話しします。

今日のメッセージは、これから1年間でどんなことを学ぶかの予告のようなものです。

## 1. 第一のテーマ：ことばの先在性 — ヨハネ 1:1-2

ヨハネ 1:1-2 1:1 初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。 1:2 この方は、初めに神とともにおられた。

ヨハネ 17:5 今は、父よ、みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光で輝かせてください。

なぜヨハネは、イエスと言わずに「ことば」という単語を使ったのでしょうか。

それは、ヨハネが旧約聖書から引用したり、関連性をほのめかしたりすることが多かったからです。

ヨハネが使った単語のヘブル語は「ダブル」です。これは、天地創造における神の力強い業と関連のある単語です。同じヘブル語の単語が、旧約聖書で使われています。

創世記 1:3 神は仰せられた。「光があれ。」すると光があった。

詩篇 33:6 【主】のことばによって、天は造られた。天の万象もすべて、御口のいぶきによって。

旧約聖書から、神が仰せられると、神のことばがすべてを造ります。

詩篇 107:20 で、神はみことばによって癒されました。旧約聖書における神のことばは、創造、啓示、そして救いの現れです。

こういうわけで、ヨハネはイエスをことばと呼んだのです。旧約聖書で「ことば」が成していたことを、新約聖書ではイエスがなされるのです。ヨハネは、旧約聖書における「ことば」の役割とイエスを結びつけようとした。そのためにもっともふさわしい単語が「ことば」だったのです。ヨハネが私たちにわからせようとしたのは、この世を造られたイエス、また旧約聖書のイスラエルの歴史の中で働いておられたイエスは、二千年前にこの地上を歩まれたイエスと同じであるということです。この方こそ、ヨハネが知り、愛し、人の形を取られた神ご自身であると信じたイエスです。

このイエスは、このお方の御名にある新しいいのちを受けるために信じなければならないお方です。

## 2. 第二のテーマ：いのちと光 — 1:4

光は闇に拒まれるが、消されることはない。(1:5)

ヨハネ 5:26 それは、父がご自分のうちにいのちを持っておられるように、子にも、自分のうちにいのちを持つようにして下さったからです。

ヨハネ 8:12 イエスはまた彼らに語って言われた。「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」

ヨハネ 3:19 そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行いが悪かったからである。

序論でヨハネが天地創造について語っていることは明らかです。創世記 1:3 で、神は暗闇に光をもたらされました。しかし、これはヨハネの福音書全体の序論であることから、ヨハネが救いにおける光と闇を指していることも明白です。この福音書で、暗闇とは単なる光の欠如ではなく、「積極的な悪」であることがわかります。

ヨハネ 3:19 を見ると、人が神の光を好まないことが分かります。なぜでしょう。それは、行いが悪いからです。

サタンの支配は確かにあります。福音の知らせは、サタンの暗闇から人を救います。

5 節は、光が闇によって消されることは決してないと語ります。これは重要なポイントです。

黙示録ではひどい出来事が起こりますが、それでも最終的にはイエスが勝利されます。

ヨハネの福音書では、光と闇について多くを学びます。救いについて、また、人々のたましいを勝ち取る霊の戦いについて、と関連しているからです。私たちは、老若男女を問わずあらゆる人々のたましいを勝ち取る戦いに参戦する備えをしなければなりません。ヨハネの福音書は、その備え方を教えてくれます。

### 3. イエス・キリストは自分の民に受け入れられなかった。 - 11 節=4 : 44

ご自分のくんに来られたとはどういう意味でしょう。

ここでヨハネは旧約聖書を振り返るように促します。神と契約を交わした民、ユダヤ民族に私たちの注意を向けます。旧約聖書は、神がアブラハムとその子孫を神ご自身に属する民として選ばれた歴史です。旧約聖書のほぼすべてが、神が選民をどう扱われたかについてです。神は、ご自身の選ばれた民であるユダヤ民族の身代わりとして死ぬために、イエスをこの世に送られました。

しかし、ユダヤ民族のわずかな人々しか、イエスを神の救済プランとして受け入れませんでした。

11 節は良い知らせではありませんが、12 節は良い知らせです。イエスを受け入れる者は、神の契約の中に組み入れられ、神の子とされます。

ローマ 11 章を読んで、その内容を理解するのも大切です。とくに、ローマ 11 : 25 が重要ポイントです。

ローマ 11:25 兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていただきたい。それは、あなたがたが自分で自分を賢いと思うことがないようにするためです。その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり、

イエスは拒絶を味わわれました。ですから、本物のクリスチャンなら誰でも、人生の中で同じ苦しみを味わいます。イエスを信じない人たちから拒絶されたり傷つけられたりしたとき、私たちは互いのために祈り合わなければなりません。

### 4. 肉ではなく神によって生まれる。 - 1 : 13 - 関連箇所 3:6、 8: 41-42.

ヨハネはここで、「新生」というテーマを紹介します。神の家族の一員として生まれるのは、人間の家族の中に生まれることとは異なります。

13 節は、3 章 6 節や 8 章 41-42 節と関連がありますが、ここでヨハネは神の恵みに権威があることを示します。

1. ヨハネは、文化的背景や血統によってクリスチャンになれる人はいないと言います。おそらく、ユダヤ民族についての言及でしょう。
2. 肉の欲、つまり性的な交わりによってクリスチャンになれる人はいません。
3. 神の聖霊に心を触れられることなく、知性のみでの決断でクリスチャンになれる人はいません。
4. 新生は神の業です。神が私たちの霊を新しく生まれ変わらせてくださいます。神は、心の叫びに応じて、人の心に神しかできない働きをされます。

リビングバイブルにはこのように記されています。

ヨハネ 1 : 13 信じる人はだれでも、新しく生まれ変わります。 神が、そう望まれたのです。 人間の熱意や計画は全く関係ありません。

#### 5. 神の栄光を見る。 - 1:14 7 18 = 12:41 & 3:16

聖書には、ふたつの栄光について記されています。 18 節では、私たちが見ることのできない神のすばらしい栄光が記されています。 もうひとつは、イエス・キリストという人があらわす神の栄光です。 ここ 14 節は、イエス・キリストという人のうちにあらわされた神の栄光についてです。

ヨハネの福音書を学ぶ中で、イエス・キリストのうちに現される神の栄光、そしてイエスをとおして表される神の栄光を見ることができるでしょう。

ヨハネの福音書を学ぶにあたり、私たちが神の聖霊に人生を明け渡し、私たちの人生にも神の栄光が現されるよう祈りましょう。 イエスを信じると告白すれば、私たちは神の御手にある器です。 傷ついた社会にイエスの愛の手を差し伸べる器として、神に用いていただけます。 けれどもまず、OIC の間でイエスの愛が働いていることを世間の人たちに示さなければなりません。

今、皆さんは傷ついていますか。 誰かに謝らなければならないことがありますか。 赦しを必要としていますか。

あなたを満たそうとする聖霊の流れを邪魔するものはありませんか。

もしそうなら、今日こそ神と正しい関係を取り戻しましょう。 あなたをとおしてあふれる神の栄光を目にするためです。

#### 6. イエス・キリストにある真理 1: 17 = 14:6

ヨハネはここで、律法と恵みの違いについて触れます。 後の章で、その違いをはっきり理解できるように説明します。 ヨハネは、私たちの考え方が常に神の「恵み」を中心としたものであるように望んでいます。

神の恵みによって素晴らしい救いを経験したクリスチャンが律法主義者になりさがってしまうことは珍しくありません。

長年の経験で学んだことは、新生したクリスチャンが恵みをしっかり理解していないと、生き方で恵みを実践することができません。 律法の型にはまらない信徒や、神学的な見解の異なる信徒に対して、恵みを持った対応ができないのです。

律法と恵みの簡単な説明。

律法は、私たちが有罪だと宣言します。 十戒の中の少なくともひとつを行いか思いの中で破っているからです。

恵みは、私たちが有罪であっても私たちが愛すると語ってくれます。 そして、神の御子イエス・キリストを送り、私たちの過去、現在、未来の罪に対する罰を身代わりに受けてくれると言います。

恵みは賜物です。 私たちにはそれを受ける資格はありません。 ただ、イエスの十字架上の死のおかげです。

イエスは、私たちの身代わりのいけにえです。 私たちの代わりに死んでくださったのです。 後日、罪の身代わりのいけにえが重要であることを旧約聖書から学びます。

7. 神のそばから来られた方以外に、神を見たことのある者はいない。 1:18 = 6:46.

ヨハネは、旧約聖書の神観をよくわかっています。ではここで、旧約聖書からいくつかの個所を見てみましょう。

出エジプト 33-34 章、イザヤ 6 章 — 神の栄光のすそのみ、等。

罪深い人間が神の栄光を見ると、死んでしまいます。 — 出エジプト 33 : 20、申命記 4 : 12、詩篇 97 : 2

しかし、イエスのおかげで、イエスという人をとおして神ご自身を現すことが可能になりました。これはすばらしいことです。

現代の私たちにとってどういう意味があるか。

最後に、ここまでお話したヨハネの福音書の序論が、今日の日本にいる私たちの生活にどう適用できるかを考えなければなりません。

1. 使徒ヨハネが教えた実際のイエスの姿と、私たちが持っているイエスのイメージに相違がある可能性があります。私たちのイエスに対する考え方を見直す必要があるかもしれません。私たちには考え方を見直す覚悟があるでしょうか。そうなれば、行動や考えを変える必要が出てくるかもしれません。必要であれば、考え方を見直そうと、決意できますか。
2. 私たちは、イエスがどれほどすばらしいお方か考えるべきです。そして、日本をはじめ、世界中の人々の大部分がイエスを受け入れていないことに驚きを覚えるべきです。
3. 私たちがすでにクリスチャンなら、イエスを信じる信仰へと私たちを導いたのは神の業であるという事実の前に、謙虚にさせられるはずで、神のみことばに従うことで、救いへの感謝を表せます。
4. ヨハネの福音書から見出す知識は、イエスについて信ぴょう性のある情報であるという確信を持ちましょう。イエスをもっと知りたいという飢え渴きを持ち、どんな犠牲を伴ってもイエスに従いたいという情熱を持ちたいものです。

ヨハネの福音書が、私たちの考え方を変え、神のみことばに沿ったものとされることを祈ります。

ヨハネの福音書をとおして、神が私たちひとりひとりに語ってくださいますように。聖霊の導きに従うなら、神は OIC を祝福し、私たちを神の栄光のために用いてくださるでしょう。

祈り